

現代の若者

筑波大学特任教授
キャリア支援室長

渡辺三枝子



「今年の新入社員は……」という言葉が職場の中で飛び交う季節を迎えた。例年のことではあるが、期待と不安が入り混じりながらも、毎年新たな響きを持ってささやかれる。学生を送り出す側でも「今年の卒業生はうまく社会になじんでくれるか……」という言葉が行き交う。この時期「あの会社は自分に合わないから辞めた」という言葉は聴きたくないのである。送り出す前に「勤めてみて初めてわかること、習うことが数知れずある……真剣に辞めたくないなら、辞める前に大学に相談に来るように」と注意する機会が増えたことに気付く。

私は、大学のキャリア支援室で、学生のキャリア形成支援の運営やキャリアアカウンセリングに関わるようになったおかげで、「現代の若者」の新たな側面に気付くことができるようになった。それは、まじめに進路を考える学生が増えたことである。特に私がシヨックなのは、「自己分析しても自分が見えない」「自己分析の結果と合う仕事がない」「自分の興味・

適性が生かせない部署に配置されたら早いうちに辞めた方がいいぞうだ」「10年先の自分が描けないので就職活動に入れない」「出世より自己実現の方が望ましい生き方でしょう」「リストトラのある企業は避けたい」「ニート・フリーターにはなりたくない」「インターンシップに行ったらそこに就職しなければいけないのか」等々の決まった文言を耳にすることが増えたことである。学生の進路選択を支援するはずのキャリア支援が実は学生を悩ましていたのではないかということがある。彼らは就職活動にまじめに取り組んだ結果、偏った情報の坩堝^{くわう}にはまり、現実社会から乖離する傾向を強めていることにも気付いた。インターネットでの就職情報や就職セミナー、就業体験（インターンシップ）紹介などがなかった時代には耳にしたことのない悩みである。「こうした現実離れた情報を元に就職したら若者自身も悩むし、採用先も困惑するであろう」と思つて、若者のキャリア支援という仕事に関わる者の責任を痛感している。

他方で、始めは現実と乖離していた若者も、相談を通して、職業・企業情報やエントリーシートの作成をしながら自己理解と現実社会の理解を深めていったり、事前・事後指導を体系的に組み込んだインターンシップをしたりすることで自己表現力や意思決定能力を発達させ、就職活動を通して、自分の課題に対処できる大人になっていくことも確かである。このような経験から、私は、若者が変化したというよりも、若者を取り囲む環境の変化にもっと注目すべきだと思うようになった。現代の若者は、学校・家庭では自立的に自分で指針を見つける力を十分に育てられない状態で、産業界が作り出した環境の変化の中で自分の指針を持たずに、突然、自己責任を求められる社会に移行させられている、と見ることはできないだろうか。もしそのようなと考えてよいとすると、送り出す学校側と受け取る企業とが、「若者を一人前の『社会人・職業人』として育てる役割を共有」する必要があるのであるのではないだろうか。

職業経験を持つ大人たちは、いつの時代も「最近の若者の働き方は……」と批って批判してきた。かつて我々も先輩からそう言われていたであろう。先輩が忍耐強く面倒を見てくれたように、我々大人のほうから若者に近づき、彼らが社会の中に入っていけるように配慮し、また彼らから学べるものは学ぶ寛容さが求められるのではないかと思われる。

プロフィール

わたなべ・みえこ ● 上智大学大学院博士課程（心理学専攻）単位満了。米国ペンシルバニア州立大学大学院博士課程（カウンセリング心理学、カウンセラー教育専攻）修了。哲学博士号（Ph.D.）取得。雇用職業総合研究所（現・労働政策研究・研修機構）職業適性研究部第一研究室長を経て、明治学院大学文学部心理学科教授、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授を歴任、2006年現職。専門はカウンセリング心理学、職業心理学、カウンセラー教育。主な著書に『インターンシップが教育を変える』（共訳）、『コミュニケーション読本』（共著）、『最新カウンセリング入門』（共編）、『さがそう相性のいい仕事』（共著）、『キャリアカウンセリング入門』（共著）、など。

